

宮澤賢治

注文の多い料理店

注文の多い料理店

二人の若い紳士が、ぴかぴかする鉄砲をかついで、白熊のような犬を二疋れて、だいぶ山奥の、木の葉のかさかさしたところを、こんなことを、いいながら、あるいて居りました。

「ぜんたい、ここらの山はけしからんね。鳥もけもの獣も一疋も居やがらん。なんでもかまわなから、早く『タン、タアーン。』と、やって見たいもんだなあ。」

「鹿の黄いろな横っ腹なんぞに、二三発お見舞もうしたら、ずいぶん痛快だろうねえ。くるくるまわって、それからどたつと倒れるだろうねえ。」

それはだいぶの山奥でした。案内してきた専門の鉄砲打ちも、ちよつとまごついて、どこかへ行ってしまったくらいの山奥でした。

それに、あんまり山が物すごいので、その白熊のような犬が、二疋いっしょにめまいを起こして、しばらく唸うなって、それから泡を吐いて死んでしまいました。

「じつにぼくは、二千四百円の損害だ。」と一人の紳士

が、その犬のまぶたを、ちよつとかえしてみている
た。

「ぼくは二千八百円の損害だ。」と、もひとりが、くやし
しそうに、あたまをまげていいました。

はじめの紳士は、すこし顔いろを悪くして、じつと、
もひとりの紳士の、顔つきを見ながらいいました。

「ぼくはもうもどろうとおもう。」

「さあ、ぼくもちょうど寒くはなつたし、腹は空すいてき
たしもどろうとおもう。」

「そいじゃ、これできりあげよう。なあにもどりに、昨

日の宿屋で、山鳥を拾円も買って帰ればいい。」

「兎もでていたねえ。そうすれば結局おんなじこつた。では帰ろうじゃないか。」

ところがどうも困ったことは、どっちへ行けばもどれるのか、いっこう見当がつかなくなっていました。

風がどうと吹いてきて、草はざわざわ、木の葉はかさかさ、木はごんごんと鳴りました。

「どうも腹が空いた。さつきから横っ腹が痛くてたまらないんだ。」

「ぼくもそうだ。もうあんまりあるきたくないな。」

「あるきたくないよ。ああ困ったなあ、何かたべたいなあ。」

「喰たいもんだなあ。」

二人の紳士は、ざわざわ鳴るすすきの中で、こんなことをいいました。

そのときふとうしろを見ますと、立派な一軒の西洋造の家がありました。

そして玄関には

「君、ちようどいい。ここはこれでなかなか開けてるん
という札がでていました。」

RESTAURANT

西洋料理店

WILDCAT HOUSE

山猫軒

だ。入ろうじやないか。」

「おや、こんなところにおかしいね。しかしとにかく何か食事ができるんだらう。」

「もちろんできるさ。看板にそう書いてあるじやないか。」

「入ろうじやないか。ぼくはもう何か食べたくて倒れそうなんだ。」

二人は玄関に立ちました。玄関は白い瀬戸の煉瓦で組んで、実に立派なもんです。

そしてガラスの開扉がたって、そこに金文字でこう書

いてありました。

『どなたもどうかお入りください。決してご遠慮はありません。』

二人はそこで、ひどくよろこんでいました。

「こいつはどうだ、やっぱり世の中はうまくできてるねえ。きょう一日なんぎしたけれど、こんどはこんないこともある。このうちは料理店だけれども、ただでちそうご馳走するんだぜ。」

「どうもそうらしい。決してご遠慮はありませんというのはその意味だ。」

二人は戸を押して、なかへ入りました。そこはすぐ廊下になっていました。そのガラス扉の裏側には、金文字でこうなっていました。

『ことに肥ったお方や若いお方は、大歓迎いたします。』

二人は大歓迎というので、もう大よろこびです。

「君、ぼくらは大歓迎にあたっているのだ。」

「ぼくらは両方兼ねてるから。」

ずんずん廊下を進んで行きますと、こんどは水いろのペンキ塗の扉とがありました。

「どうも変な家だ。どうしてこんなにたくさん扉があるのだろう。」

「これはロシア式だ。寒いところや山の中はみんなこうさ。」

そして二人はその扉をあけようとし、上に黄いろな字でこう書いてありました。

『当軒は注文の多い料理店ですから、どうかそこはご承知ください。』

「なかなかはやってるんだ。こんな山の中で。」

「それあそうだ。見たまえ、東京の大きな料理屋だって

大通りにはすくないだろう。」

二人はいいながら、その扉とをあけました。するとその裏側に、

『注文はずいぶん多いでしょうが、どうか一々こらえて下さい。』

「これはぜんたいどういふんだ。」ひとりの紳士は顔をしかめました。

「うん、これはきつと注文があまり多くて、『支度が手間取るけれども、ごめん下さい。』とこういうことだ。」

「そうだろう。早くどこか室の中にはいりたいもんだ

な。」

「そしてテーブルに坐りたいもんだな。」

ところがどうもうるさいことは、また扉が一つありま
した。そしてそのわきに鏡がかかって、その下には長い柄え
のついたブラシが置いてあつたのです。

扉には赤い字で、

『お客さまがた、ここで髪をきちんとして、それ
からはきものの泥を落してください。』

と書いてありました。

「これはどうももつと尤もだ。僕もさつき玄関で、山のなか

だとおもって見くびったんだよ。」

「作法の厳しい家だ。きつとよほど偉い人たちが、たびたび来るんだ。」

そこで二人は、きれいに髪をけずって、靴の泥を落しました。

そしたら、どうです。ブラシを板の上に置くや否や、そいつがぼうっとかすんで無くなって、風がどうっと室の中に入ってきました。

二人はびっくりして、互によりそって、扉をがたんと開けて、次の室へ入って行きました。早く何か暖いもの

でもたべて、元氣をつけて置かないと、もう途方もないことになってしまふと、二人とも思ったのでした。

扉の内側に、また変なことが書いてありました。

『鉄砲と弾丸たまをここへ置いてください。』

見るとすぐ横に黒い台がありました。

「なるほど、鉄砲を持つてものを食うという法はない。」

「いや、よほど偉いひとが始終来ているんだ。」

二人は鉄砲をはずし、帯皮を解いて、それを台の上に置きました。

また黒い扉がありました。

『どうか帽子と外套と靴をおとり下さい。』

「どうだ、とるか。」

「仕方ない、とろう。たしかによつぽどえらいひとなんだ。奥に来ているのは。」

二人は帽子とオーバーコートを釘にかけ、靴をぬいでぺたぺたあるいて扉の中にはいりました。

扉の裏側には、

『ネクタイピン、カフスボタン、眼鏡、財布、その他金物類、ことに尖^{とが}ったものは、みんなここに置いてください。』

と書いてありました。扉のすぐ横には黒塗りの立派な金庫も、ちゃんと口を開けて置いてありました。鍵まで添えてあったのです。

「ははあ、何かの料理に電気をつかうと見えるね。金気のものはおぶない。ことに尖ったものはおぶないところいうんだろう。」

「そうだろう。して見ると勘定は帰りにここで払うのだろうか。」

「どうもそうらしい。」

「そうだ。きつと。」

二人はめがねをはずしたり、カフスボタンをとったり、みんな金庫のなかに入れて、ぱちんと錠じょうをかけました。すこし行きますとまた扉があつて、その前に硝子がらすの壺が一つありました。扉にはこう書いてありました。

『壺のなかのクリームを顔や手足にすっかり塗つてください。』

みるとたしかに壺のなかのものは牛乳のクリームでした。

「クリームをぬれというのはどういうんだ。」
「これはね、外がひじょうに寒いだろう。室のなかがあ

んまり暖いとひびがきれるから、その予防なんだ。どうも奥には、よほどえらいひとがきている。こんなところで、案外ぼくらは、貴族とちかづきになるかも知れないよ。」

二人は壺のクリームを、顔に塗って手に塗ってそれから靴下をぬいで足に塗りました。それでもまだ残っていましたが、それは二人ともめいめいこっさり顔へ塗るふりをしながら喰べました。

それから大急ぎで扉をあけますと、その裏側には、

『クリームをよく塗りましたか、耳にもよく塗りましたか。』

と書いてあつて、ちいさなクリームの壺がここにも置いてありました。

「そうそう、ぼくは耳には塗らなかつた。あぶなく耳にひびを切らすとこだった。ここの主人はじつに用意周到だね。」

「ああ、細かいとこまでよく気がつくよ。ところでぼくは早く何か喰べたいんだが、どうもこうどこまでも廊下じゃ仕方ないね。」

するとすぐその前に次の扉がありました。

『料理はもうすぐできます。』

十五分とお待たせはいたしません。

すぐたべられます。

早くあなたの頭に瓶の中の香水をよく振りかけてください。』

そして戸の前には金ピカの香水の瓶が置いてありました。

二人はその香水を、頭へばちやばちや振りかけました。ところがその香水は、どうも酔のような匂がするのでした。

「この香水はへんに酔くさい。どうしたんだらう。」

「まちがえたんだ。下女が風邪でも引いてまちがえて入れたんだ。」

二人は扉をあけて中にはいりました。

扉の裏側には、大きな字でこう書いてありました。

『いろいろな注文が多くてうるさかったでしょう。』

お気の毒でした。

もうこれだけです。どうかからだ中に、壺の中の

塩をたくさん

よくもみ込んでください。』

なるほど立派な青い瀬戸の塩壺は置いてありました

が、こんどというこんどは二人ともぎよつとしてお互にクリームをたくさん塗った顔を見合せました。

「どうもおかしいぜ。」

「ぼくもおかしいとおもう。」

「沢山の注文というのは、向うがこっちへ注文してるんだよ。」

「だからさ、西洋料理店というのは、ぼくの考えるところでは、西洋料理を、来た人にたべさせるのではなくて、来た人を西洋料理にして、食べてやる家とこういうことなんだ。これは、その、つ、つ、つ、つ、つまり、ぼ、ぼ、

ぼくらが……。」

がたがたがたがた、ふるえだしてもうものが言えませんでした。

「その、ぼ、ぼくらが、……うわあ。」がたがたがたがたふるえだして、もうものが言えませんでした。

「遁にげ……。」がたがたしながら一人の紳士はうしろの扉を押そうとしましたが、どうです、扉はもう一分も動いちぶきませんでした。

奥の方にはまだ一枚扉があつて、大きなかぎ穴が二つ付き、銀いろのホークとナイフの形が切りだしてあつて、

『いや、わざわざご苦労です。』

大へん結構にできました。

さあさあおなかにおはいりください。』

と書いてありました。おまけにかぎ穴からはきよろきよろ二つの青い眼玉がこっちをのぞいています。

「うわあ。」がたがたがたがた。

「うわあ。」がたがたがたがた。

ふたりは泣き出しました。

すると扉の中では、こそこそこんなことをいっています。

「だめだよ。もう気がついたよ。塩をもみこまないようだよ。」

「あたりまえさ。親分の書きようがまずいんだ。あすこへ、『いろいろ注文が多くてうるさかったでしょう、お気の毒でした。』なんて、間^ま抜^ぬけたことを書いたもんだ。」

「どっちでもいいよ。どうせぼくらには、骨も分けて呉れやしないんだ。」

「それはそうだ。けれどももしここへあいつらがはいつて来なかったら、それはぼくらの責任だぜ。」

「呼ぼうか、呼ぼう。おい、お客さん方、早くいらっし

やい。いらっしやい。いらっしやい。お皿も洗ってありますし、菜っ葉ももうよく塩でもんで置きました。あとはあなたがたと、菜っ葉をうまくとりあわせて、まっ白なお皿にのせるだけです。はやくいらっしやい。」

「へい、いらっしやい、いらっしやい。それともサラダはお嫌きらひですか。そんならこれから火を起してフライにしてあげましょうか。とにかくはやくいらっしやい。」

二人はあんまり心を痛めたために、顔がまるでくしゃくしゃの紙屑のようになり、お互にその顔を見合せ、ぶるぶるふるえ、声もなく泣きました。

中ではふっふつとわらってまた叫んでいます。

「いらっしやい、いらっしやい。そんなに泣いては折角せつかくのクリームが流れるじやありませんか。へい、ただいま。じきもってまいります。さあ、早くいらっしやい。」

「早くいらっしやい。親方がもうナフキンをかけて、ナイフをもって、舌なめずりして、お客さま方を待っていられます。」

二人は泣いて泣いて泣いて泣いて泣きました。

そのときうしろからいきなり、

「わん、わん、ぐわあ。」という声がして、あの白熊の

ような犬が二疋、扉をつきやぶって室の中に飛び込んできました。鍵穴の眼玉はたちまちなくなり、犬どもは「うう。」とうなってしばらく室の中をくるくる廻っていましたが、また一声「わん。」と高く吠えて、いきなり次の扉に飛びつきました。戸はがたりとひらき、犬どもは吸い込まれるように飛んで行きました。

その扉の向うのまっくらやみのなかで、

「にやあお、くわあ、ごろごろ。」という声がして、それからがさがさ鳴りました。

室はけむりのように消え、二人は寒さにぶるぶるふる

えて、草の中に立っていました。

見ると、上着や靴や財布やネクタイピンは、あっちの枝にぶらさがったり、こっちの根もとにちらばったりしています。風がどうと吹いてきて、草はざわざわ、木の葉はかさかさ、木はごとんごとんと鳴りました。

犬が「ふう。」とうなってもどってきました。そしてうしろからは、

「旦那あ、旦那あ、」と叫ぶものがあります。

二人は俄にわかに元気がついて、

「おおい、おおい、ここだぞ、早く来い。」と叫びまし

た。

簑帽子をかぶった専門の猟師が、草をざわざわ分けてやってきました。

そこで二人はやっと安心しました。

そして猟師のもってきた団子をたべ、途中で十円だけ山鳥を買って東京に帰りました。

しかし、さつき一ぺん紙くずのようになった二人の顔だけは、東京に帰っても、お湯にはいっても、もうもとのとおりになおりませんでした。

日本文学電子図書館

注文の多い料理店

著 者：宮澤賢治

制作者：宮澤一郎

底 本：「グスコー・ブドリの伝記」
羽田書店

昭和16年4月20日 第1刷発行

昭和24年7月20日 第10刷発行

日本文学電子図書館